

# 私の思い出

大正町大奈路

小野川利國

手記

## 私の思い出

私は昭和五年三月二十七日、大正村大奈路尋常小学校を卒業しました。四月より仕事しないといけないのですが、何の仕事をするか考えもしなかったのです。学校では同級生は十八名、男九名、女九名居りましたが、成績はいつもビリの方で、卒業もズビ抜きの生徒でした。

高等小学校に進学した人は一名でしたが、当時の子供は、小学校を卒業したら子守さんに行くか、男子は山仕事に行くか、各家々が現金収入がないので、一銭でも働いてお金を取って家計を助ける仕事をせねばならなかった。

私は三年生の時分から、毎朝、谷からの水汲み、畑の芋のつるを返しとけ、麦の中の草を引くと、母の言いつけで出来ることは、家事の手伝いを毎日しました。

当時、父も祖父母も居らず、母と養女と、兄と私の四人家族でした。母は毎日、営林署土場の倉庫の木炭整理の仕事に行っていました。一日の賃金は七十五銭くらいだったと思います。それで私も卒業と同時に仕事に出ることにしました。

大奈路の地元には昔から山仕事の達人がたくさん居りました。大きな材木を山から搬出する仕事の名人がたくさんいるうちでも名人という先遣りの人、小野川誠馬さんが芳川の国有林で仕事をするようになったので、『利國、茶沸かしの仕事に行け。』と言って貰ったので、行くことにしました。

まずは仕事着を作るのに、当時は大奈路にミシンで作業服を仕立てる人、武内夏恵さんが居りましたので、股引（足首に小ハゼ一枚が付いた通称バッチ）二本とシャツ二枚。一枚作るのに四〇銭くらいだと思います。地下足袋に素足（靴下なし）でした。小さな道具（鋏、輪切り【鋸】）も揃えて、部落の先輩たちと現場へ行った。

さて、当時は芳川部落へ行くのには車は入らないところで、自転車も乗り入れることは出来なかった時代でした。私たちが国有林内に行くには、「竹ノ谷」へ入って小野川誠幸さんところの前の尾根を、自分の荷物は全部背中に背負って山越えした。通称その道は「せこノ尾根」と昔から言っていました。ここを越して下って行くと芳川の川奥に下ります。ここに人家がある。佐々木松次さん、佐竹常太さんと両家を借りて国有林内の「屋鋪ノ駄場」という場所に事務所と人夫小屋を建てに通い、寝泊まりできる家を造ることから始めたのでした。

この事業は、奈良県天理市の天理教総本部の増改築工事の用材として、天然木の桧で、長さ（当時の単位は全部尺でした）四〇尺、十三メートル無節で末口が六十七センチメートル以上、全部根本を掘って倒した。本数は芳川山で四〇本。折合おれあひとで総数六〇本【註、折合五本】でした。

私の仕事が始まりました。毎朝五時に起き、まず大きな石油缶でお茶を沸かし、炊事婦さん（かしきさんと言った）の作ったご飯を人夫さんの寝床の各個人ごんにのどころに配る。人夫さん各人の場所の広さは畳一畳分でした。寝るのも食事をするのもすべてその場所でした。人夫さんが起きて食べ終わったら、山の現場で食べる弁当二食分をまた配って、その間に自分も食べ、大人たちと一緒に現場へ行く。

一回目の茶沸かしは午前十時に食事をするとき、午後は二時の二回の茶沸かしが私の現場での仕事で、二時の食事が済んだら三十人く三十五人分の弁当殻【箱】を集めて棒に差して、前と後ろに振り分けに肩に担いで小屋まで帰る。身体が余りに小さいので、『弁当殻が動きよる。』と言って笑われたりしました。

そして、夕食の準備からランプの掃除と、日暮れまで色々と用事をし、人夫さんの帰るのを待って、帰ってきたら人夫さんの小使。購買へ行って味噌とか炒り粉とか

を個人のが【もの】を買いに何回も行ったりして、夕食が終わったら風呂に入って、私は夕食の食い反りで寝る。朝五時に留とどおばさん（かしきさん）に起こされるまで、白河夜船の高いびきでした。

毎日の日課は変わらず、先輩たちの仕事の要領も次第に分かって、見よう見まねでやれることがあればやる。また小使いもあれこれ取ってこいとか、山仕事の道具の使い方も色々とある。木一本切っても切り方がある。すべて先輩のやることを見て記憶した。桧材の切り方も現場で見た。桧まさん二人、根本を掘る人三名、計五名で二日くらい掛かった。

柚さんの指示により倒す方向を定める。材の胴体を傷めないように倒さないと、柚さんの責任になるので、根本を三ツ指（三本足）で立てらすようにしてから、倒す方向に片側の枝だけを切り落として、倒す方の側の枝は残して胴体のなやしに使用して倒す。

いよいよ倒すときには、柚さんは遣り声と言葉を言う。これは昔から山の神様と、また、人が下から上ってくるかも分からないので、この声を三回言うて倒し始める。『この木は左チョウナー！ オオナガセに行くぞー！』と、三回大声で必ず柚さんが言い

ました。

そうして、桧は倒して寸法通り玉切ったら根本の方を先にして、土の上には一度も下ろさないうで集積所まで出して行く。途中、傾斜のないところでは「かぐら」という道具を使って引き出した。

また、色々と女で出来る仕事もあつて、人夫の奥さんも働いており、この「かぐら」巻きは女十人くらいが一組で仕事をした。「栃木ノ駄場」まで集まるのに、場所によつては、尾根で切った材は、谷までワイヤロープ十八ミリで材をくびつて【縛つて】立木に巻き付けてソロリソロリと吊り下げて谷まで出してきた。谷間の平坦地に着たら、雑木を切つて丸太にして横に並べて、その上に載せて、岩石とか土とかに触れさせないように、空木道を造る。当時、山で木道を造るには全部谷間に自生する蔓かずらでくびり合わした。

木道きみちのできたところは「かぐら」という道具を大工さんで作つて、女性の人で十人掛かつて、ワイヤロープを取り付けて八人掛かりで巻いて、人夫さんが材の先端を二メートルくらいのところまでツルで張り上げて、ズリリ／＼と出してきた。この用材は特殊材で、何処にでもある木ではないので、四十本全部場所が違つているので、日

数も掛かるわけです。

「屋舗ノ駄場」より四キロ余り奥に「栃木ノ駄場」がある。各そこそこより集めた材を、ここを起点として軌道を造ることになった。軌道を造るのに何処から資材をここに入れるかと思つていた私は、先輩に聞いたたら、中津川の下に成川なるかわ事業所がある。一ノ谷までの営林署の機関車で成川まで揚げて、尾根を【レールを】肩に担いで山越えして運んできて、「栃木ノ駄場」で大工さんの上岡政藤さんが組み立てして、連結トロツコにした。二台へ一本の材を積み込んで、曲がりカーブをスムーズに出すために二台にしたのだそうです。

また、軌道のレールの敷設は専門の技術者でないと出来ない。中津川の林盛枝さんでした。この人は、曲線の箇所を見てきて、「シンクロ」(レールを曲げる機械)を掛けて、人夫さんに『持つて行って合わせて見よ。』と言うと、二本の線がピッタリ合うほどの名人でした。

「栃木ノ駄場」より次第に下がつてきて、六林班の出口より七、八十メートルくらい登つたところに「とがたび」と言う小さな滝壺がある。その滝壺の上に軌道が掛かつたときに、私は午後の二時の食事が終わつて弁当殻を肩に担いで帰るときに、滝壺

にアメゴが十匹くらい太さ三十センチ余りのがいたので、豆粒くらいの小石を落とすと、虫かと思つてバシヤツと泳ぐ。毎日帰るときには五、六分くらい眺めて帰つたことでした。そんなにアメゴがおつたけれど、誰一人としてそのアメゴを捕つて食べるごににしなかつた。人夫さんたちも良心的に仕事に夢中であつたと思う。

当時の人夫さんの一日の労働時間は、朝は夜明けとともに現場に行き、まず目的地（丁場）に着いたら、寒い時期でしたら焚き火をして、個人々々の道具の手入れをする。例えば斧、鋸、鉋などの、またトビロ、ツルの先を焼直しして、材を引つ張る道具を毎朝手入れする。それから作業をする。何時ということなしで夜明けから日暮れまでが一人役でした。賃金は上賃が一円十銭前後でした。

私が朝五時起床で、午後七時頃まで走り使いをして一日の賃金四十三銭でした。六ヶ月くらいして四十五銭になり、二年間くらい働きました。この間に一度も家に帰つて遊びたいとか、朝寝をしたいとか、また山で寂しくて泣くとか、全然一度もなかつた。勉強はしなかつた。出来なかつた。休みは、お正月三が日、部落のお祭り、お盆休み三日間の一年間に十日くらいで、日曜祭日も休みなしで、年中無休でした。

当時の食費代とかは、お米が大奈路で一升の金額が十五銭くらい（はがき一銭五厘、切手三銭、たばこバツト七銭、散髪十五銭、地下足袋七十五銭、お酒一升七十五銭）だつたようですが、芳川の現場では一升二十一銭だつたと思います。

毎日のお弁当（食事）は一日四回食べました。人夫さんたちは炊事婦の炊いたお弁当（量り飯）一人八合食べました。私は一回に一合五勺、四回で一日六合、副食は毎日味噌、炒り粉、漬け物、たまに塩鯖の辛いのを。副食品は全部個人々々で準備しなくてはならなかつたので、一週間くらいの間には一回は自宅に帰つて、副食品を準備して朝三時頃起床して、松明を明かりにして団体で「せこの尾根」を越して仕事の時間までに到着、一日の仕事に時間の切れないうにしています。

当時は、人夫さんの賃金は一人ひとり差がありました。一銭二銭のお金で仕事をしました。それで私の一ヶ月の食事代を差し引いて、

一日賃金 四十三銭×三十日＝十二円九十銭。

一日食費 お米六合×十二銭六厘×三十日＝三円七十八銭。

一月賃金 差引残高 九円十二銭。

このお金（九円前後）を母に渡しました。

「栃木ノ駄場」を起点としてのトロッコ軌道、広葉樹で軌道を造つて「屋舗ノ駄場」

の夫婦小屋の前の河原が第一回目の中継土場でした。「栃木ノ駄場」から「屋舗ノ駄場」までの距離は四キロ前後であったらうかと思うので、川内の四万十川まで中継土場が五回。五回目の最後が川内の四万十川になります。

昭和五年【六年】十二月頃であったと思いますが、天理教総本部の大管長【二代真柱様】がお出でのときの写真がありますが、大管長のすぐ後ろに居りますのが私で、前列で杖を持っている方たちは大管長の随行の方々です。十一人居ります人たちが作業員です。【作業員は】全員で四十人くらい居りますが、芳川部落より通勤で、毎朝自宅を五時頃出発して、道中松明の明かりで私たちと一緒に現場へ行きました。

大管長さんが根本から掘り倒した材に腰を掛けているところ【の写真】ですが、真下で何か見ている人は、大正村古宿の林徳長さんです。柚さんで、この桧を切り倒した一人です。柚さんが四名居りました。

前後になりましたが、【後に】見えている削ぎ葺き屋根の家が事務所で、【その】裏側が夫婦小屋です。

第一回目の中継土場である家の前に、ここから奥の材が揃ったので、第二回、第三回、第四回と出で行きました。

昭和六年【七年】の春先になると、谷淵ではあるし、山椒やイタドリ、木の芽が出る時期が来ると、茶沸かし場に『河原の窪みのある石を焼いちよけよ。』と言われた。食事のとき、弁当をあけてみんなのおかずを、味噌も漬け物も何もかも焼き石の上に載せて、お茶を少しかけて、石の熱によって焼けた味噌を山椒などに付けて、みんなが車座になって食事をしたことは、今思い出しても楽しかった時期です。

ある時、十時の茶沸かしが済み、食事をして、石叔父（広田石次）と蔓を採りに行くと言うて近くの小さな谷間に採りに行った。しらくち（蔓の名前）がかなり大きな木にぶら下がっているので、蔓に取り付いて木に登った。

そして、切って落としたところが、さて今度は下に降りることが出来なくなった。上がるときは簡単に上がったが、降りることを考えていなかったので困って、『石叔父よ。来てや。』呼びよつたら、石叔父が気が付いてくれた。『利よ。もつと上にあがっちゃれ。じいがこの【隣の】木を切ってその「枝の」股へ掛けちやるけん。叩かれんところまで上がれ』。自分は上へ上へと上がった。石叔父が（はいの木）を切り掛けてくれた。その木は小さい木で、叔父やんにぶら下がって降りた。

このとき、蔓一本採っても、一から先輩たちのすることを見よう見まねで覚えねば

と思った。鋸、鉋、木の根本の切り方、倒す方向など、すべて動作を見て覚えた。

三回目は、民家を借りて寝泊まりしました。佐々木福治さん処でした。その時分お家の裏へ少し上がって行くとイタドリがあつて、採ってきて小野川昌さんに酢味噌和えにして貰って食べたことが記憶にあります。第三回目が芳川の部落の二股のところと少し下がったお茶堂の中程に広場があつて、そこが三回目の中継土場でした。

四回目は、川内近くの小崎の下側で、歩道の向かいに田んぼがあるところの広場で、中継土場はここで終わりで、川内口で四万十川です。元木と末木とで筏にして、下田港へと出しました。四万十川川口の中村市は当時町でした。

芳川山では終わりましたが、私の住まいの大奈路より中津川谷の途中に、古宿谷国有林があります。その谷からも出しましたが、ここからは三本か、五本までと思いません。

そして、古宿の出しが終わると、窪川町折合国有林事業所がありました。ここでは何本出したか記憶がない。五、六本くらいではなかったかと思う。大正村と窪川町とで全部で六十本くらいでした。

折合の出した場所は、折合事務所のすぐ上の谷で二本。事務所より下側の、お檜<sup>かいそ</sup>曾

さんに使った谷と思います。その谷で、三本か五本くらいと思います。折合では軌道まで出して私は終わりでした。昭和七年【八年】五月か六月までです。二年二ヶ月でした。一日四十五銭が二銭上がっていました。

昭和七年【八年?】十月頃、四万十川を毎年営林署事業所の材木、中津川、久良川、高取事業所の材を中村町下田まで、バラ流しにしておりました。私の住まいの下に成川事業所の土場がありましたので、学校に行く時分には仕事場で悪いことをして叱られたりした。夏は筏にしてよく下田まで出した。

また大正、窪川には馬車引き、荷車引きが居り、中土佐町久礼まで馬車に積んで材木を出した。昭和の初め頃まででした。馬車引きは、大奈路を朝三時頃出発して、日帰りするのに、午後の九時、十時頃になると話に聞きました。

話の方向が変わっていきよりました。

私も、七年【八年?】十月頃、大正村での流材も今年で最後の川流しとなるのととで、また茶沸かしで、後でトビロと二十四インチの赤塗りの自転車を買って貰って、小さい身体で皆さんに付いて行きました。

大正村下道一キロ半くらい奥の久良川事業所の材を、人夫さんが四万十川の川入れ

材とし、浅瀬の箇所は、その材木で堰き止めて、材を浮き上がらせるようにしては、次々と流した。人夫さんは百人くらいの人々で、先盤、中盤、後盤の三組に分かれて立ち返して、堰出しといって、順次流して、田野々の鉄橋の下もそうして堰をして水を止めたときは十二月初旬であったと思うが、七年【八年？】の年は子持ち鮎が堰の材と材の水漏れのところの吸い寄せられて、随分採れ、焼いて食べたことでした。

四万十川の五カ所【六ヶ所？】の荒瀬、轟の瀬、二股乗り、四手三島瀬、四手上側の大在の瀬、十川上側の小見の瀬、最後の茶壺の瀬を四万十川の荒瀬と言いました。もう一カ所、川登りの七・八間と言う堰もありました。中村町での宿屋は鉄橋の元にあつたと思います。

流材の仕事が終わった昭和八年二月の終わりか三月の初めであつたかは忘れませんが、最後の日の前日に入野の松原へ行くことになって、皆さんと一緒に行ききました。そのとき、海と言うところを生まれて初めて見ました。

翌日中村を出発して大正村大奈路に帰りました。七年の流材のときの私の賃金については、七十五銭くらいと思うが、記憶がない。

これまでの間は、すべて山仕事ばかりで大奈路地区、また近くの部落の先輩の人た

ちが仕事があるからと言ってくれたり、呼びかけて頂いたりして、手を抱えて遊ぶような日はない。皆さんがよく助け合ってくれました。

年が経ち、月日が経つうちに賃金も一円五銭というところまできました。色んな仕事をしました。

古宿山の国有林で営林署の軌道の工事が始まり、土方仕事もやりました。仕事は大正村内では色々な仕事で休みはなかった。二人で石垣をついた昔話をしたことでしたが、大正内で仕事がないときには、先輩の方々と組を作り、働きに行き、次第に腕前が出来、度胸も出来た十八歳くらいから、奈良県吉野郡上野地方面に仕事に出ました。五、六人くらいの組で、小さい身体で木馬引きもやりました。木馬引きは、登りは泣く泣く、帰りは楽々です。材木の重量でワイヤ通しですので、舵を取っていればよいので、帰りは楽です。

昭和十年頃、土場で仕事をしたとき、ワイヤロープの継ぎ手を自分なりにしていたら、大阪の人が近くについて、『それはロープ継ぎだからすぐ抜ける、巻き差しにせよ。』と教えてくれた。それでワイヤロープを継ぐことを覚えた。後々非常に私にはプラスになったので、十津川村の木材の搬出には、索道でも八百メートル、千メートルを越



すような設備もやっておりました。

## 家族のこと

私の母は、明治二十年八月二十日生まれでした。母の百姓の仕事などを私が知ってきた時期については、何歳くらいからかはあまり記憶にない。「子は親の姿を見て育つ」と言われているが、母は無学であったと思いますが、百姓仕事をして一年間の全部、時期々々によって、てきぱきとやったように思った。

私は毎日々々、畑や田んぼに行って足手まといになったことと思うが、自分たちはおしめが要らなくなった時分から、小学校卒業頃まで、全部の子供たちは、パンツなにか着けている子供は一人もいなかった。生徒全員が昭和五年頃まで着けていなかった時代でした。夏、川に水泳に行ってもみんな真っ裸でした。

母が家の仕事をするときには、いつも付いて行き、母の仕事を付いてやり、百姓の一年中の仕事内容を見よう見まねでした。母は女同士の方々が部落内に六、七人いたと思う。その人たちと色々仕事々々によって手間仕事に行ったり、また来て貰ったりしていたときでも、私は付いて行ったりした。

百姓をする道具すべての使い方は、思い出しては使った。百姓の道具といえども、何んぼでもあった。母からは『利國、勉強したか。』と言う言葉はほとんど聞いたことがなかったと思う。

母が仕事に行く朝は、私ができるような家の用はすべて言いつけて行った。母の言いつけの内容については、春夏秋冬四季を通じてすべて違い、時期に応じた仕事でした。

五年生時分であったと思うが、学校から帰って『麦をダイガラで臼引きしちよけ。』と言いつけられたときに、麦は一度踏んで、干して、またもう一度臼踏みをしなないと飯にはならん。一度目の麦踏みをして、庭に箆を敷き天日に干して、早速下の川へ水泳に行つて遊んでいたら、武政佐市叔父と、下村始叔父とが、ウナギ突きに二人で来たので、付いて行つて見よう思つて、ウナギの穴を探しては川下へと行った。川の内の口近くまで行つて、佐市叔父が『大きなが居るぞ。』と始叔父に言つて、二人お互いに穴に近寄りよつた。

私は何気なく空を見上げると黒雲が出始めていた。これは大変と思つて川上へ走つて帰り始めたら、雨がポロポロと来始めた。麦が雨で叩かれると思つて一生懸命走つ

て帰つたけれど間に合わず、麦は濡れてしまつていた。母に随分叱られたことでした。

母は頭の髪はいつもきちつとしていたと近所の方々が話していたことを聞いたことがあった。学問のことについては何も言わなかった。祖父、祖母、また父のことについては一切私たちには話さなかった。ただ、『内らあは、大木の下で、小木が育つようなものであるから、人を見習え。』とよく言われた。

兄丑馬については、学校では成績はよかつたであろうと思う。昭和三年卒業生で、一年間か分からないが、田野々青年学校に確か自転車で通学したと思います。

翌五年四月からだつたと思うが、トタン細工職人になる考えだつたようです。幡多郡中村町東下町、堅田ブリキ店に弟子入りに行くことにしたときに、自転車に二人乗りで田野々の熊野神社の下まで行つて、渡し場で別れた。兄は徒歩で杓子峠を越えて中村へ行き、何ヶ月して帰つたかは記憶がない。

兄は家を建て替える考えをいつ頃から思いついたであろう、と思うことは、自分が小学六年のときでしたか、はつきりとした記憶がないが、寺の上の兄の持ち山に、杉、松、家道具になる木があつた。竹ノ谷の武政重太郎叔父（柚でした）を雇つて切つて、柚さんの道具（ハツリ）で、上道具（用材）を取つて乾燥させた材を木馬を造つて、

三尺くらいなので、寺の上まで学校より帰ったら、引っぱり下げて来たことを私がした記憶がある。

その時分に製材業者が移動性で鉄道の枕木を挽く人が、製材機を人力でかき揚げていたので、その業者に頼んで色々と家道具を造ったものと思うが、兄が若年で、年齢も十三、四歳で家の建て替えを思いついたこと自体が私には納得がいかない。未だに不思議に思う。

母には話していたであろうが、母は私には何も言っていなかった。そして、昭和七年に、大奈路の大工さん近森広さんでした、小さな家でしたので、代金は四十五円だったと聞いたように思います。当時五円の金子を他人から借りるとしたら、保証人が二人必要でしたから、昭和初期の当時の記憶としては、二十一年頃まで、一銭二銭は大切なお金子でした。

この時代に兄は、小さいとはいえ、家を建て替える考えを、年齢もいかないうちを卒業したばかりで、材料の段取りから、よくやったと思うのです。

兄はブリキ細工をしてもって、田舎芝居が好きで、同輩や後輩の友達を集めては、夜遅くなるまで、芝居の稽古をして、練習が出来たらしく、お寺で一度やって皆さんに

喜ばれたことがありました。

そして、兄は大奈路部落、また校下の青年団長も長年しておりました。学校の卒業式などには、先生、部落の区長さんたちと参加した。昭和十三年に写した写真、田野々の永野健さんも参加しています。

同じ兄弟でも十人十色と申しますが、母が、丑馬は外面そとずらはよいが、内面うちづらが悪いと私に時々言っておりました。外では他人には面白い話をするのに、内では母にも口荒いことを言っておりましたからと思う。

私は前後になりますが、学校へ行っても山、川、何処へ行っても素足でした。寒い時期毎年正月前後に足袋を履くくらいでした。それで向こう脛すねに生傷の絶えたことがなく、尚かつ、青年になっても兄と一緒に、青年会があるうが、青年大会があるうが、一度も参加したことがなかった。

ただただ毎日々々先輩達と仕事々々で、今日こそ休みたい、遊びたい、朝寝をしてやろうとか、このようなことは一度もなかった。先輩の人たちからは、『遊びたい時期に、よう辛抱すらあや。』と言われ、『尻軽くよう働く子じゃ。』と言うてくれた。

昭和初期の頃の地元の先輩たちの賃金は、腕前、また目先の見える人で、一日一円

二十銭が最高額でした。一円十五銭、一円十銭、一円八銭とか、一銭二銭の差であったが、とにかく、当時の人夫さんは陰日向なく仕事をした。無言の内で仕事の仕合でした。一寸でもずる仕事をする人は賃金が下がる。勤務時間は夜明けから、夕方は夜星と言う時間でした。

一日の食料は大人でお米毎日八合、一日四回の食事で、主食は炊事婦さんが、午前  
三時半から起きて炊いて、朝食、昼食の弁当二回、夕食でした。副食は全部個人々々  
で作っていました。私たちは、味噌、炒り粉、漬け物、年がら年中、たまに塩鯖くら  
いが副食でした。

私の賃金は始めは四十三銭でした。四十五銭になったのは六ヶ月くらいしてだっ  
と思います。

○ 文中の【】内及び、見出し、ルビ、傍点は史料部。

編集 天理教高知大教会 史料部

平成十二年五月一日

第二刷 平成二十五年九月三日

第三刷 令和三年十一月二十日

